区部ユース・プラザ基本構想検討委員会第２回における主な御意見の概要

【今後掲げていくコンセプトについて】

○何のための施設かを考える時には、都が設置する公益施設であることを意識する必要がある。基礎自治体がやれる役割とそうではない役割を大きく分けたときに、都が広域的に担う必要があるかどうかはとても重要。その点からは、障害のある子たちのための、例えば特別支援学校の支援、バリアフリー、ユニバーサルデザインのような要素や、多様な人に対応するところは、広域的な施設の売りになる。

○コンセプトとしては、フォローしていく形か、もしくは都がこの施設を使って成功事例として引っ張っていく仕組みを作っていくのかも考える必要がある。

○何のための施設なのか考えるもう一つ上位に、誰のための施設なのか、それこそ小学生、中学生、高校生、教育関係者、学校内のための施設なのか、学校外の活動のための施設なのかといった、誰が利用していくのかの視点も必要。

○まず根底にユニバーサルアプローチが大前提であるというところは外せない。ただ、施設のみでこのユニバーサルということではない。小・中学生は、義務教育の中で、地域との結びつきの強い年齢層になっており、基礎自治体との結びつきというのは取り組みやすい。一方で、行動半径が広がる高校生以降に関しては、そういった場所は限られている。東京都全体で考えた時に、基礎自治体でアプローチしにくい年齢層に対する部分に、特にサポートが必要ではないか。

○多摩地域、区部に共通して、これまでの施設は既に何らかに所属している方が利用しているということが多い印象を持っている。根底にユニバーサルアプローチとして考えた時に、なかなか人間関係に接点が持てない若者に関しては、一人でふらっとこういった施設を利用するというのはあまり考えにくい。そういった社会的に特にサポートが必要な若者が、利用できるような側面というのが、このユニバーサルという観点から考えた時に、両方の施設に欠けている要素ではないか。

○東京都としての上位のコンセプトが必要であることと、インクルーシブ、共生の観点が入ってくることは必要。地域に開かれて、一緒に何らかの価値を作っていくような役割が求められていることから、施設で行うことの対象が、子供と関わる大人にどこまで何ができるのかというような点や、青少年に効果をもたらすに当たっての体制的なところの整備まで補うような施設になるのかどうかといったところも議論が必要。

○施設、ハード面のニーズの点から、コンセプト、機能ということで考える時に、子供たちの自主的な活動の体験学習、文化やスポーツを支援する支援者とか指導者の方々に参加いただく。そこで学んだことを、またさらに区部や東京都の中でいろいろと展開していく機能が求められるのではないか。東京は既にスポーツ施設や文化施設は、民間、公的なものを問わず多様にある。その中で、文化やスポーツを通して、子供たち、青少年の主体的

な活動、あるいは体験活動の場の実現、あるいは障害者も含めた、ダイバーシティな社会を実現していくという上位コンセプトに組み替えていく必要はある。その中で、体験学習なのか、ダイバーシティ的な共生社会なのか、表にどの部分を出すかというところを考えていく必要がある。

○特別支援学校の行事で宿泊した際に、同じ時期に来ている団体と毎年一緒になり、「何か交流出来たら面白いね」と教員の中で話をしていた。そこを繋ぐような役割のようなものがあると、障害のある子にとって使いやすい宿泊施設を超えて、存在意義をもっと見出せると思う。また、ちょっと押してもらえれば、あるいは助けがあれば普段全然関われない人と関われる、そういう手助けの場や機能もあるといい。

○その施設があることによって、新しい青少年団体や、e スポーツの団体などが生まれてきて活躍してもいい。社会教育の原点として、組織というかチーム作りみたいな機能を果たしていくことは非常に有益な施設ではないかと思っている。SNS など、個人ではつながり合えなかったところを施設が橋渡しすることで、同様の興味関心を持った若者が集い活動していくことが、広域施設としても非常に重要な役割ではないか。

○現在の 2 施設は生活圏内からは少し距離がある、ある種の非日常性を持ちうることが、裏を返せばメリットかもしれない。他の施設との役割・ポジショニングの違いもここで明確にしておいた方が、施設としての地位も高まるのではないか

○平日での役割と休日での役割を切り分けて考える必要性もある。例えば、平日で生徒たちが学校に通っている間に施設を利用する際は学校のプログラムの一環として利用していく。一方で、休日に関してはキャリア教育の団体等、平日と異なるコンセプトの団体の利用が多いと思う。それぞれの利用者がどういう役割として捉えて利用するのかというところも考える必要がある。

○人を含めて施設の構成要素だと考えた場合、どういう専門性のある人材が置かれるべきなのか考える必要がある。立地からフラッと行ける施設ではないという環境面の状況を踏まえ、施設の外にある施設や団体と繋がる際のハブになるような機能を、人材とセットで持たせていくことがすごく重要になると思う。

○中身をどうコーディネートしていくかというソフトの部分がしっかりしていることが大事。コーディネーターが、周りの施設・団体・イベントをどれだけコーディネートできるかどうかに、施設の価値が決まっていくところは大きい。ソフトの動かす部分の機能を一つマネジメントとして大きく立てておく必要がある

○デジタルによって、施設の中でなくても活動ができるけれども、その施設発のコンテンツが増えてくる。ロケーションの問題とコンテンツがどこでできることなのかということも、デジタルを前提に議論していく必要がある。

【都と他の施設との役割分担について】

○多様なニーズへの対応や、共生社会を先駆的に体験できることに加え、グリーンであることや、環境面に配慮した経験や体験をできる要素は重要。高尾のような自然環境に加え、都市型のエコ生活のようなことができると、何か新たなことが始まっていくきっかけとなる。もう一つは、デジタル。環境やデジタルの要素を組み込んで、新しい形での主体的な活動の支援の場にしていくことで、旧来の団体が集まる場だけではない形のコンセプトを組み込んでいくことがあり得るのではないか。

○その地域の中だけでは解決できない課題や青少年の問題は沢山あると思う。枠組みを越えて基礎自治体の中で実施したり、出会う場を作ったりすることは難しいのではないか。都だからこそ、枠組みや領域を越えて支援したり、出会う場や情報共有する場を作ったり、指導者と接したりということができるのではないか。

○学校と社会教育団体を繋ぐのは、都だからこそできることではないか。学習者や支援者の学びや交流の場ということは、都の社会教育施設が青少年と青少年を支援する人々のところで果たしていく役割だと思う。

○教員の働き方改革も言われているなかで、今まで学校が担ってきたところを、社会教育施設や他の団体で担ってもらえると学校にいる者としてかなりありがたいと思う。

○東京はNPO団体・民間企業を始め、様々な団体や資源が多く、有利な部分があると思う。大都市としての青少年あるいは社会教育の環境を整えるモデルというのか、一つのやり方があると良い。都市としては国際的な面であったり環境に力を入れていっていたりとか、そういった大都市としての特性もあると思う。東京という大都市圏での課題解決モデルが作れるようなところがあっても良い。

○社会教育団体はここ数年物凄い勢いで新しい団体が増加した一方、活動場所がなく、2年くらいで終わってしまう団体が多いと感じている。そもそも論として、どういった団体がどういった活動をしようとしているのかを知ってもらえる機会も一つ重要だと思う。

○高校生が主体の学生団体も増えている一方で、高校生自身が運営したり、施設を活用したりすることは稀な状況にある。都の施設として、高校生が主体となって、施設の一部を子供議会や子供食堂のように、場所をどうやって使っていくのかということを考えていくのは、自分達で新しい物を取り入れ、代替わりし、施設を時勢に合わせてより良く使っていけるのではないか。

○自治体にとらわれず、繋がり合いながら何かをしていこうというスタンスは、インターネットの時代、当たり前のように行われている。基礎自治体の場合、使用者の居住制限等、様々な制約もあるため、そういったところを広域自治体だからこそサポートができるのではないか。

○多様な学びの機会を確保していくという意味では、例えば平日に学校に来ていないお子さんに対する教育プログラムの提供を都で行い、自治体にフィードバックして進めることは大変有益だと思うし、現状の社会課題に対しても非常に効果的ではないか。

【区部と多摩の役割について】

〇ユース・プラザの周辺状況において、多摩と区部の周りでは、どういった物がもっとあるのかを知った上で役割分担を考えるべき。

〇区部は周りにスポーツ施設も多く、商業施設も近い。近年、東横キッズとか社会的排除の子どもたちのなかで言うと、商業施設の方に居場所を感じるのだけれども、居場所がないような若者たちにしてみれば区部のほうが、行きやすいのではないか。一方で、豊かな自然に触れて落ち着いた地域で、周りにネオンがないところのほうが落ち着く、例えば発達障害ぎみの若者たちとか、人との人間関係に疲れた若者たちは多摩地域が向いているかもしれない。明確な違いを出すのは難しいが、多摩の方は自然、区部の方は都市型という違いは出せる。両方とも体験は大事だと思っており、そこで分けることは考えていないが、特性の違いはあるかと思った。

〇東京は学校がいっぱいあるので、学校を越えた高校生たちの交流、学校を越えた大学生たちの交流というのも区部・多摩問わずユース・プラザに求められていることの役割と感じる。

〇学校に所属している子たちの学校を越えた繋がりと、学校に通っていない、学校に通えていない子たちの支援という機能を、エリアで行うことも意味があるのではないか。